

The background of the cover is a dark, atmospheric illustration. It features a large, dark, winged figure, possibly a dragon or a large bat, with its wings spread, perched on a branch. The scene is set against a backdrop of a sunset or sunrise, with a large, glowing orange and yellow sun partially obscured by the figure. The sky is a mix of deep reds, oranges, and purples. The overall mood is mysterious and dramatic.

Salamander  
in  
the circle

第三章  
変 態

峯村 明

# Salamander in the circle

## 登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・・・ ネウトラ評議会・学術調査団の団長  
ヒューダー・・・・・・・・・・ 〃 団員  
ヤスウ・・・・・・・・・・ 〃 団員  
レル・・・・・・・・・・ エウメロス王国・王室付き近衛隊長  
ヘルガ・・・・・・・・・・ 〃 ・王女  
マミヤ・・・・・・・・・・ ホシナの娘  
パウル・・・・・・・・・・ ケストル王国・国王  
ウルリク・・・・・・・・・・ 〃 ・第三王子  
ソルド・・・・・・・・・・ 〃 ・警備隊長  
サノヒコ・・・・・・・・・・ 島の王に仕える役人  
コタエ・・・・・・・・・・ 島の王に仕える女官

## 目次

[登場人物](#)

[目次](#)

[変態](#)

[39.](#)

[40.](#)

[41.](#)

[42.](#)

[43.](#)

[44.](#)

[45.](#)

[46.](#)

[47.](#)

[48.](#)

[49.](#)

[50.](#)

[51.](#)

[52.](#)

[53.](#)

[54.](#)

[55.](#)

[56.](#)

[57.](#)

[第三章のあとがき](#)

[奥付](#)

## 変態

39.

真っ暗な闇。そこにそいつの目が浮かんでいた。白目に小さな点のような瞳。それは親切そうでも優しそうでもなかったが、面白がっていた。

うふふふふふ、と風が吹くような笑い声。空に浮かぶ半月みたいに白目の下を弓なりにしたそいつは口の中で笑っていた。ぼくはといえば、あまりの薄気味悪さにちぢみあがって、声も出ない。

「おやおや。そんなに怖がることはないのに。キミのような子が」

ぼくのような子……？ こいつはぼくのことを知っているのか？？

「知ってるかといわれれば知ってるし、知らないのかといわれれば知らない」言葉の下に笑い声が潜んでいる。うふふふふふふ……

あとずさりしようとしたぼくはよろめいた。ぐらっとバランスをくずしてお尻が床か地面か、なにかの上に落ちる、そう思った。でもいつまでたってもショックが来ない。落ちていく。底が抜けたみたいどこまでも落ちていく。落ちていくだけなんだ。ぼくは絶叫した。助けて！！ 誰か、ぼくを助けて——！

歪んだ半月が笑っているような目が、上からぼくを見おろしている。でもその距離がいつまでも変わらない。同じ距離を保って、ぼくは落ちていく。わかった。こいつはぼくを助けたりしない。

忘れたと思っていたものが息を吹き返す。

＊

たくさんの、対になった目が上から見おろしている。地面を這うぼくを。

一対の、年取った目が何か言った。みんながいっせいにそっちを見て——いろんな色を見せる。同意、恭順、ひそかな反発、ひそかな戸惑い、畏れ、哀れみ……。

ひとつも同じ色が無い。けれどもいっせいに同じ動きをする。いっせいにうなずいた。満場一致でぼくの運命は決まった。たくさんの目の向こうで、長く尾を引く悲鳴。……おかあさん——？

なにかに閉じ込められた。

上も下もない世界に、意識も感情も身体も、生きたまま。

身動きできず、声も出ない。

そして、落ちていく。

誰かがささやく。忘れよ、と。すべて忘れよ。おまえにできるのはそれだけだから。

＊

まったく、ひどいことをするもんだねえ、と悲しそうな声が聞こえた。「怖かっただろう。恐ろしかっただろう。私にはキミの気持ちがよくわかる。かわいそうに」  
悲しそうな声はしばらくすすり泣き、やがて言った。「私は、キミの味方だよ」

味方——？

「そうとも」

そいつの目は上の方からぼくを見ていた。距離を変えずに。落ちていく感覚も変わらない。

「キミはほんの小さな子どもだったのに、彼らは寄ってたかってキミを怖がらせ、恐ろしがらせた。ねえ……それって、許せないよ、ね」

彼らを—— 許せない——

「そうだよ、キミがいったいなにをしたっていうんだい？ 彼らのしたことはあまりに、あまりに、理不尽だ。許しちゃならない」

……………

「キミの気持ちがよくわかる、って言っただろ？ 私もね、かつて、それはそれは怖い、恐ろしい、理不尽な目に遭わされたのだよ。その時の恨みを、私は忘れちゃいない。そんな目に遭わせたやつらを、決して、許さない」

——それは——誰？

「……神々、さ」

＊

「ほら、私とキミは同じ傷を持ってる。だから友だちになれる」

そいつの目が、ぐっと近寄ってきた。目のほかになにも見えないけれど、そいつが手を差し延べてきた気配を感じた。

なにか、ちがう、という気がする。でも、後ろ向きにどこまでも落ちていく恐怖はどうしようもない。落下が止まらないにせよ、とつぜん終わるにせよ、ただですむわけではない。

ぼくは怖かった。怖いものから逃げたかった。それで、そいつの手をつかんだ。

すると、そいつは闇の中から姿を現した。頭のとっぺんからつま先まで、闇と同じ色の衣装を着て目だけのぞかせたそいつは、巨大な鎌を担いでいた。

「ベネトナシュ、と呼んでくれたまえ」、そいつはそう言った。

ベネトナシュは、友だちができた、といって有頂天だった。よほど友だちがいなかったんだろうか。

友だちになったんだから、なにかプレゼントしよう、と言う。でも、ぼくにはプレゼントというものがなんなのかわからない。おそろおそろそういうと、彼はひどく驚いたようだった。

「キミ、プレゼントを知らないの！？ いや！ まさか！ そんなことって！」

いつまでも驚いているので、だんだんむかむかしてきた。そんなに驚くようなことなんでしょうか？ しまいには、ベネトナシュは涙ぐんでいた。

「あのね、キミ、なんでも欲しいものを言ってごらん。私がそれをあげるから」

ぼくの、欲しいもの？

「そうだよ、さあ、言ってごらん」

ぼくの、欲しいもの

「うん？」

——彼はぼくと話したいと言った。ぼくも彼と話したい

「彼……もしかして、あの立派な体した男のことかい？ ああ……そう……」

ベネトナシュは黙ってしまい、なにか考えている。やがて、こう言った。

「彼の名は『剣を持つ者』だ。彼と話したければ、キミも剣を持てばいい。どうやって？ それは私が教えてあげる。そうだ、剣の扱い方を教えてあげる。なに、キミはただ受け取ればいい。私からのプレゼントだからね」

ぼくがつかんでいたベネトナシュの手はとても冷たかった。ようやく、気がついた。ぼくには声があり、つかまる手があり、固い地面に立てる足があった。

40.

「呼び出しだぜ。ついて来いってよ」

ヤスウに云われてヒューダーは寝台から起き上がる。眠ろうとしたが眠れず、考え事もまとまらない。目を閉じてじっとしているだけだった。身なりを整え、部屋を出ようとして振り向くとヤスウと目が合った。

ヤスウは言った。「呼び出されたのは、あんただけだよ」

ヒューダーはうなずき、後ろ手に扉を閉めた。ヤスウは閉まった扉を見つめてひとり、立たずんでいた。

「おまえは、あの——」

あの白髪の少年だった。だが、ほんのわずかな間に体がひとまわりもふたまわりも大きくなっていた。子どもはしばらく見ないうちに成長するものだとかいうレベルではなかった。

最初に見た時は卵から孵ったばかりのヒナのように弱々しかった。今、赤い目は意志的に輝き、手足には力があつた。容れ物はいっしょだがまるで別人だ。いったい何があつたのだ。そう問わずにいられない変わりようだった。

「その方が望んだであろう。この者と話したいと」、とソルド。

たしかに望んだ。しかし——

「おまえの、名は？」

少年は思ってもみなかったことを聞かれた、というようにきょとんとした表情を浮かべた。顔をしかめて、「……なに？」と聞き返す。

「おまえの名前だ。なんという？　なんと呼べばいい？」

少年は首をかしげ、それから横に振った。「……なに？　わからない……」

ヒューダーはソルドを振り返る。ソルドは肩をすくめた。「名前を忘れたらしい」

いや、とヒューダーは思った。忘れたという反応ではなかった。名前、というものがわからない、そもそも、それがなんなのか知らないのではないか？

少年に向き直って尋ねてみる。「お前は名前を持っていない、そうか？」

少年はおずおずとうなずく。「名前——持ってない」

ソルドが鼻を鳴らした。その向こうでソルドの部下数人が私語を交わしている。（そんなことってあるか？）（ありえん）（アタマが弱いんじゃ）

エウメロスのレルがケストル兵の規律のゆるさに呆れていたが、ヤスウもはげしく同意していた。ヤスウなりに不快な目にあったのだろう。

名前がない。ヒューダーはひどく心動かされている自分に驚く。そして自分でも思いがけないことを口にする。

「オレが名前をやろう。どうだ？」

少年は、え？　というように首をかしげる。「くれるの？　プレゼント？」

「そう、プレゼントだ。ヒューダーが名づける。おまえはイリチャだ」

少年は口の中でその音の連なりを繰り返し、顔をしかめた。「『i』がみつつも続くよ。言いにくい」

「まあ、そういうな。古い言葉で『槍』という意味だ」

「ほかにはないの？」

「すぐに思い浮かぶものでもない。とりあえず受け取っておけ。そのうちにおまえが気に入るようなのを考えてやろう」

そこはかたく不服そうなイリチャ少年の顔を見て、オレはなにをやっているのだろうとヒューダーは思う。

イリチャの声は音域が狭く、聞き取るのに苦労する。本人もしゃべりづらそうなどころを見ると、変声期なのだろう。最初に見た時はこどもこどもしていたのに、今は、変声期？ 彼の中では確実に時間が進行し、成長過程にあるということではないか。

#### 41.

「おまえは3号通路というところにいたそうだが、なぜそんなところにいたのだ？」

「なぜって——」おかしなことを言わないでほしい、そんな口調だった。「ずっと一緒だったじゃないか。ぼくはたぶん、途中で気を失って——気がついたら真っ暗なところにいた。そのうちに、そっちの人たちがやってきて明るいところに連れ出されたんだ」

ソルド一味がうなずいている。彼らがイリチャを通路から連れ出した。それには複数の証人がいるということだ。しかし……ずっと一緒に、途中で気を失……まさか……

「まさか、おまえは——」この少年は、あの——

「だからそう言ってるじゃないか」ぼくはアレだって。

「ならば——」

ヒューダーには聞きたいことがあった。とにかく。この少年がアレならば、マミヤとダーヴェの行方を知っているはずでは——

ヒューダーとイリチャとがにらみ合うように見合っていると、ソルドが割り込んできた。

「困りますなあ、調査官どの、ネウトラ評議会の方々には様々な特権をお持ちですが、こんな密航まがいのことをされては。いや、まさにこれは密航。犯罪ですぞ」

ヒューダーは目だけ動かして大男を見て言った。「ならば、どうする？」  
「まあ、それなりの罰則が適用されるかと」

無表情を装っているが、ヒューダーの目にはソルドの感情が透けてみえる。この男は何かを期待してわくわくしている。それは……彼らにとって悦ばしい『何か』、なのだ。この部屋の空気はおかしい、とヒューダーは思った。この部屋だけでなく、この施設の空気全体がおかしい。ヤスウとふたりきりになるとヤスウも同じように感じているとわかった。別行動をとることになったレルは大丈夫か。いや、部屋に残してきたヤスウは――

「それはどんな罰則か？」懲役か。罰金か。はたまた――

ソルドは無表情の下でにんまりと笑った。  
「ご存じの通り、ここはケストル王家の離宮である。このような場所にてあまり事を荒立てぬようにと、王子殿下からお指図があった。よって、その方らには円遊会に参加していただく」

ヒューダーは相手にわかるように眉根を寄せてみせた。なんだそれは？ の意思表示として。園遊会？ パーティに出席しろというのか？

片や、ソルドは眉を持上げ、（おそらく）笑った。「では、のちほど。お迎えにあがる」

イリチャは促されて別室に退く。

42.

「なにがえんゆうかいだよー」ヤスウは吐き捨てるように言った。嫌悪のあまり顔つきが変わっている。

「たしかにパーティかもな。主賓はオレだ」

入り組んだ山と谷の複雑な地形の底、半地下のような場所にそれはあった。天然の無蓋の円形闘技場だ。全体はすり鉢状、壁に観覧席がぐるとしつらえられている。離宮と地下道で繋がっているということは、目的のひとつは娯楽なのだ。

観覧席の一部にステージがあり、数種の打楽器が打ち鳴らされている。観覧席は四分の一くらい人がはいっている。よく見れば楽器奏者も観覧者らもみな軍の制服を着ていた。ようするに、内輪向けのイベントなのだろう。ヤスウが、あ、レルだ、とつぶやく。数少ない招待客というところか。と、楽曲の音量が下がり、ざわついていた観覧者たちがいっせいに立ち上がった。みな同じ方向に体を向けている。ひときわゆったりした天蓋つきスペースの席はロイヤル・ボックスらしい。そこに、老人が現れた。遠目にも豪華なローブを瘦せた長身にまとい、王冠らしきものを頭に載せている。観覧者たちの歓呼の声。

(王子様じゃねえな)

(国王陛下か)

国王の陰からなにか現れた。飾りのある支柱に取り付けられた大きな鳥かごだ。かごの中は目にも鮮やかな瑠璃色をした鳥。国王が席に着くと、ちょうどその面（おもて）のとなりにくるような位置に。鳥かごの背後にいるのは世話係だろうか。

(マミヤ！)

(え？)

(鳥かごの後ろにいる娘だ。間違いない！)

兵士ばかりの闘技場に、瑠璃色の鳥と簡素な白いローブの黒髪の娘はひととき目を引かずにはいなかった。そう。レルの目をも。

王が軽く手を挙げると歓呼は止んだが、兵士たちの目はロイヤル・ボックス（の可憐な姿の娘）に注がれっぱなしである。しかしレルは――

打楽器の調子が変わり、兵士たちは手拍子を始めた。観覧席の下のスペースにある扉が開き、兵士が数人、闘技場内に入ってきた。その中にイリチャがいる。

(なんだか、また大きくなったな)

(のどかなこと言ってんじゃねえよ！！ あんた、まさかあのガ、いや、少年と――)

(この場所でほかに考えられるか。よほど、我々を、オレだけじゃない、おまえも、あの少年も、ここから外へ出したくないのだ。ヤスウ、オレになにかあったら、迷わずここから脱出しろ。いいな迷うんじゃないぞ)

(相手はこどもだぜ、なんでなにかあるのが前提なんだよ！)

兵士たちが胸と腕、脚に金属製のプロテクターを装着させる。頭にはヘルメット。ケストル製のものでお世辞にもかっこいいとはいえないが、こいつには似合うんだよなあ。とヤスウは感心してしまう。

黙ってされるに任せていたヒューダーだったが、例の腕輪を外そうとする兵士を振り払った。「触るな」、と一喝する。

「き、規則なので……」

「資格のない者が手をふれると天罰がくだるぞ」

ソルドが近寄ってくる。「ほう？　どのような？」

「――雷が落ちる」

「おもしろい。試してみようではないか」

腕輪はソルドの手に渡った。

#### 43.

「彼はプロテクター無しなのか」

イリチャは簡単なカッティングの革の服だけだ。あいにく子ども用のプロテクターが手に入らなかったのだというが。見るからに戦士然としたヒューダーはそこそこの装備を施しているというのに。相手の細っこい少年はただの革服とは。

（これじゃあ、見世物じゃねえか！　ひとを犯罪者扱いして、罰は見世物！？　王さまもご見物！？）

怒りと不快感がない交ぜになったヤスウはぎりぎりど歯ざしりする。罵りたいのだが、適当な言葉が思いつかない。それでまた歯ざしりするヤスウであった。

ヒューダーとイリチャはそれぞれ闘技場の反対側から兵士に前後を挟まれて中央に誘導される。イリチャの表情は……心なしか、嬉しそうだった。ソルドのように喜びを押し隠しているというのではない。本当に嬉しそうに見える。ヒューダーはなぜそんな顔をするのだと、尋ねたいくらいだった。

互いに向き合って誘導してきた兵士たちが立ち止まり、それぞれぐるっと90度向きを変え、ロイヤル・ボックスに向けて儀仗を捧げる。しかしヒューダーもイリチャもケストル王に捧げるものも理由もない。そこでただ立っていると、観覧席から怒声が飛んできた。怒声は怒声を呼び、あっという間に怒声の嵐だ。

騒然と嵐が吹き荒れる中を、兵士が大型のワゴンを登場させた。数種類の武器を載せてある。矛、弩、鞭、剣、斧、棒、槍などなど、武器と名の付くありとあらゆる物が、よくも集めたというくらい、そろっている。二個の重い石を皮製の紐でつないで投擲する、巨人族の道具を彷彿とさせるものまである。その中からどれを選んでいいということらしい。

イリチャは躊躇なく槍を選ぶ。ヒューダーは思う。『槍』などという名をつけてしまっ、まずかったかもしれん。オレは剣を取るしかないではないか。剣も幾種類かあり、適当に選んでグリップの具合と重さを量ってみていると——ぽつり、と——雨滴だった。雨。そういえば体がじっとりと汗ばんでいる。緊張のためだろうと考えていたが、空気が湿り気を帯びてきていたのだ。

ぽつり、ぽつり、と間を置きつつ、雨滴は落ちてくる。誰も気に留めない程度の雨だったのだが……

闘技場の固められた地面が雨を受けて匂いを放出し始めた。降り始めの雨の匂いという、あのなんとも郷愁をかきたてられる匂い、そして——。

突然、その光景がヒューダーの前に現れた。祖先の記憶ではない。彼自身の記憶だった。南極海の冷たい強風が吹き抜け、断崖に荒波がしぶく荒れた土地。古いが頑丈な砦。その奥の暖かな暖炉。柔らかな敷物。食卓。彼の故郷。彼は己の記憶力を呪った。この匂いは血。それも襲撃者の血だ！

間違いない、ヒューダーは確信する。ここは巨人族の、いってみればホーム・グラウンドだ。

#### 44.

生まれて初めてもらった名前はなんだか言いにくかったけど、ぼくの気持ちは浮き上がった。うれしい、ってこういう気持ちのことかな。

ぼくが『槍』と名づけられたと知って、ベネトナシュはたいそう喜んだ。「なぜ私が喜んでいるのか、って？ それはね、槍は剣より強いからさ。くらべものにならないくらい強いんだよ」

なんだ、ぼくに名前がついたんで喜んでるわけじゃないのか。

いったん浮き上がった気持ちがしぼんでくると、ベネトナシュは言った。「キミに剣を教えたさろ？ それはヒューダーの剣だったんだ。理屈からすれば、キミたちは同等に撃ち合える。でもそれじゃあ、つ……いやいや……もっと深く話し合いをしたいのなら、キミが強くなるしかない。だから剣より強い槍という名は願ったり叶ったりなのだよ。……わかるかな？」

よくわからない

「まあ、わからないのも無理はない。これはちょっと込み入った、難しい理論だからね。でも私の言うことに間違いはない。なぜなら私はキミの唯一の理解者で、友達なのだから」ベネトナシュは誓いを立てるように片手を胸に当て、目を伏せた。

「さあ、行きたまえ。そして必ず槍を選ぶのだよ。ヒューダーは必ず剣を選んで、キミと深い話し合いをしようとするだろう。幸運を」

幸運を祈られ、ぼくは闘技場へ出ていく。

45.

航空機の離陸の瞬間にヤスウの魔法使いの血が騒ぐように、剣を手にしたヒューダーは全身の血が逆流するのを感じる。彼はたしかに戦士の血を持っていた。数千年も遡ることができる彼の血は、殺戮こそが己を証明するものだと主張する。そしてその一方で、より強い戦いの力の前や、五感を超える事象の前ではなんの役にも立たない事実をも突きつけてくる。

血の逆流の高揚の中で、彼は己の無力を知ることになる。

繰り出されてきた槍の穂先をかわした時、最初の兆候を感じた。相手はヒューダーの足の運びや剣を構える体の位置や角度をよく知っているようだった。何度も対戦したことがあるような、熟知している、そんな余裕。

相手が迷う様子もなく槍を選んだことを思い返せば、その扱いにも既に心得があったということか。槍は剣に比べて習得するには、はるかに時間がかかる。いったい、いつ、どこで、そんな時間があったのか。イリチャはこの姿になってから一日と経っていないはず――

瞬く間に二度、三度と繰り出される突きは恐ろしく早く、まったく同じ場所、ヒューダーの心臓を正確に狙っていた。長期間の修業を経なければ不可能な正確さ。そうであれば――天才の技だ。

切っ先をかわしつつ、フェイントをかけようとして脚をはらわれた。槍が回転したのにも気がつかなかった。体重移動の瞬間を見逃さない緻密さ。崩れかけた体制を取り戻そうとすると今度はその位置に石突が待っていた。そして再び足払い。とにかく、速

い。穂先にも石突にも、柄にもまんべんなく力がいきわたっている。

そうか、とヒューダーは思った。嬉しそうにしていたのは自信ゆえか。それはともかく——攻撃しなければ負ける——

すると、ふっと槍の動きが止まった。イリチャの表情は、嬉しそうというよりは戸惑っているように見えた。もっと嬉しそうにしてもよさそうなものなのに。

相手の思惑はどうあれ、このチャンスを逃す手はない。反射的にヒューダーは剣先を相手の喉元に突きつけようと踏み込んだ。致命傷を負わせるつもりはなかった。だいたい、イリチャと対戦する理由がない。これは見世物なのだ。早く終わらせてしまおう。

次の瞬間、脇腹に激痛。観客がどおっと沸いた。

#### 46.

騒々しい打楽器の音と大歓声を浴びて、剣士が闘技場に膝をつく。左脇腹に槍先を貫通させたままだ。

ヤスウはあぜんとした。「あの体格でいつも『オレは文官』で言い張ってひんしゅく買ってたけど、まさかホントに弱かったなんて！！」あぜんとするあまり、なにかあったら迷わず脱出しろという、ヒューダーの言葉をすっかり忘れている。

「こ、これ、決着ついたってことだろ？ 見世物は終わり——」

しかし、ソルドたちは拳を振り上げ、振り回し、歓声をあげ、指笛を鳴らし、その場

を動こうとしない。

「終わりじゃあねえのかよ——」

むしろ、まだ何かを待っているようだ。

と。何者かが闘技場に飛び出してきた。ケストル人は例外なく暗色の髪色をしている。飛び出してきた金髪の男はレルだ。まだ闘技場に置かれていた武器類のワゴンから大斧をつかみ、中央のふたりに駆け寄ろうとする。気がついたイリチャは槍を抜きとろうとしてヒューダーを呻かせた。ヒューダーも斧を手にしたレルに気がついていた。とっさに脇に刺さっている槍を抜き取らせまいと、その柄を両手でつかむ。これでイリチャを釘付けにできるかと思いきや、イリチャはヒューダーが落とした剣を蹴り上げ、空中で捕まえた。鋭い気合とともに襲ってくる大斧をその剣で受け止める。ぎん、とにぶい音がして剣は真っ二つに折れた。得物を失ったイリチャはさっき手放した槍を求めて振り返る。そこにもうひとり。空から飛び込んできたヒューダーの援軍がいた。

ヤスウは力任せにヒューダーから槍を引き抜く。引き抜きながらヒューダーには回復力を、抜き取った槍には滅失力を送り込む。槍は形を保っていられなくなって粉々に崩れた。

「何をしているヤスウ！ 逃げろ！！」

「そりゃこっちのセリフだ！ いっしょに逃げるんだ！」

ソルドと部下たちが怒号を放ちながら四方八方から殺到してくる。

イリチャの剣を真っ二つにしたレルは重い斧を地面に突き立て、肩を上下させながら相手を凝視していた。「レル、よせ！！」ヒューダーの声にうなづいて応じる。「ボクとて武人のはしくれ、心配は無用！ と言いたいところだが、こいつはまずい！ 強すぎる！！」

「ヤスウ、ふたり抱えて飛べるか！？」

「おお、任せろ！！」

ヤスウは移動力を全身にまとい、ヒューダーとレルごと飛ぼうとした。その時だった。

「待って！！」と、イリチャ。

「待って！！」と、女の声。

彼らは声の来る方を見た。レルはイリチャを、ヤスウとヒューダーは女を。長いローブの裾をからげ、脚をむき出しにして女が走ってくる。

「マミヤか！」しかし走り寄るマミヤを兵士が遮ろうとしている。

「ヒューダー！！」マミヤは叫び、「これを——」なにか小さなモノを兵士の頭越しに投げてよこした。ヒューダーは懸命に右手を伸ばしてそれを受け取る。兵士の脛を思い切り蹴りつけて悲鳴をあげさせたマミヤはヒューダーに笑顔を向けた。

「ヤスウ！　ひとり増えた！　いけるか！？」

「お、おおお、行ける、たぶん」

しかし、笑みを浮かべたまま首を横に振る彼女を、ヒューダーは信じられない思いで見つめる。「なぜだ！」

「それ、たしかに渡したわよ！　あたしはヘルガさまのところへ——」

女の声にレルとイリチャが同時に振り返ったとき、マミヤはかけつけた兵士に両腕をとられていた。そして引きずられていく。ヤスウは叫んだ。「し、しょうがねえ！　とにかく三人だ！」

47.

ベネトナシュに吹き込まれた言葉はぼくの体を勝手に動かす。自分の体が自分じゃないみたいに勝手に動くんだ。

言うとおりにしたのに、ヒューダーとの話し合いはうまく行かなかった。それどころか、ヒューダーを傷つけてしまった。そんなつもりじゃなかった。

レルは、ものすごく、怒っていた。背中を撫でてくれた優しいレルじゃなかった。どうして。そんな怖い目でぼくを睨むんだ？

マミヤの声がぼくを我に返らせる。ぼくはマミヤを追いかけて来たんだった。やっと会えた！　なのに、どうして首を振る？　どうして行ってしまう？

どうして！

どうして！

どうして！

ぼくは悲鳴をあげる。声をかぎりにさけぶ。けれども声がでない。

わけのわからない感情が身体のなかで渦を巻く。行き場を見つけれられないこの渦は、いったいどうなってしまうんだろう。

どろどろと煮えたぎる溶岩流みたいな渦巻き。これはぼくの内にいるのか、外にあるのか。

それとも——ぼく自身か。

真っ赤な渦巻きはついにぼくを中心に立ち上がり、天に向かって焰の柱と化す。耐えがたい高温。焚き火のなかで燃やされたらこんな感じだろうか。

でも——不快じゃない。いや、むしろ——

気が遠くなるような快感。全身が戦慄にふるえ、身もだえして泣きたいくらいだ。

嬉しくてたまらない。

『これがぼく』だ。いや、『これはぼく』だ。ぼくはかくあるべきだった。

火と熱はぼく、ぼくそのものなのだ——

周囲に火の壁がある。ぼくの外に火がある。火がぼくを取り囲んでいる。ぼくが意思するのを、待っている。

自分の体がかわっていくのがわかる。

熱い……！ 声がでる……！

今まで感じなかったものを感じ、使えなかった域が使えるようになりつつあるという実感。

なにかが体の底から駆け上がってくる。

体が、弾けとぶ。溶ける。

……いずれにしても自分のものではなくなる、強烈な快感。

熱くて、気持ちがよくて——ぼくは思いきり、歓声をあげた。

48.

闘技場の真ん中で何かが炸裂した。すり鉢のような闘技場を光と炎が渦巻く。何が起ったのかわからない。彼らが飛んだのは、その直前だった。

ヤスウはヒューダーとレルを抱えて闘技場から航空機の発着場へと瞬間移動した。とりあえず態勢を立て直そうとしたのだったが、発着場には誰もいず、ヒューダーが乗ってきた航空機は格納庫から簡単に引き出すことができた。闘技場と離宮の間は地下通路で繋がっているが、山ひとつ分くらい離れている。離宮と発着場も似た構図で、闘技場からは相当離れている。

「言ったとおりだろ？」航空機奪還を提案したのはレルだ。「ここの連中のことだから持ち場を離れるくらい、へいきでやるさ」

「全員揃って見世物見物か」

「そういうこと。さあ、早く横になって！ ああ、手がしびれてしまってうまく動かない」大斧で剣を折るという荒技をやったのけたレルが仮眠用ベッドを引き出しながらぼやいた。プロテクターを外す細かい作業になるともどかしさはつのる。

「西だ、ヤスウ！」ヒューダーは呻きながら声を絞り出す。「東には巨人族がいる。西へ！」

「いいけど。けど——、ついてくるぜ——」

「ヒューダー、アレはいったい——」

「変身するところを見ていなかったのか？ アレはイリチャだ」

「目の前にいきなり火の壁が現れたところまでは覚えてるけど——」それはヤスウが移動に入った瞬間でもあった。

「とにかく飛べ、ヤスウ、ケストルの追手がかかる前に！」

ヒューダーは苦し気に呼吸しながら、話すのをやめない。

「古い、古い、言い伝えがある。火の神と水の女神とが子を成した。火の神には妻が何人もいて、そのひとりが嫉妬のあまり、神々に注進した。水の女神の子が神々に反乱を企てるだろうと。たしかに、その子は水神を母に持ちながら父をも超える火の力を持っていた。赤子がぐずると、火災が起こって世界を半分燃やしてしまったのだ。怖れた神々は名前を取り上げたうえに、非力な水棲動物に姿を変え、円環の中に閉じ込めた——」

「非力な水棲動物——」

「いうまでもなかろう。神々は母親の嘆きの大きいのを憐れんで、円環を破邪の水の中へ沈めたと、言い伝えは続く。ホシナの里で気づくべきだった。あのイモリは黒曜石の破片で埋まった沢の中で見つけられた。黒曜石は別名、破邪の石でもある」

「ヒューダー様ともあろう者が、それを今まで思い出さなかったのかい」

「面目ない。あれこれ考えなきゃならんことばかりだったんでな。火の壁をみて初めて思い出した」

「ああ」とレルがうめく。「円環は彼にとって形態を縛る魔法みたいなものなんだ。ボクは彼を丸いプレートに載せて持ち運んでた……それを3号通路で落っことした……」

「とどめは円形闘技場だ」

「アレは最終形態なのかなあ」

「アレ以上大きくなれるとどうつきあったものか」

「輪っかに嵌めればまた元通りになるんじゃないの？」

「そんな大きな輪っかがあればの話だね」

長く鋭く前方へ突き出したくちばし。涙型の目。全身を白い羽毛が覆っている。広げた翼の差し渡しは——15、6メートルはあろうか。三人が乗る航空機より少しばかり小さいがそれでもその大きさは生き物としては巨大といえた。

ヒューダーはつぶやいた。「火の神も水の神も、本当の姿は竜だというが——」

巨大な鳥のような『火の精霊』、翼竜。

「ヤスウ、とにかくケストルから離れよう。ケストルの影響の及ばないところまで誘導する。ついてこさせるんだ」

#### 49.

「マミヤに何かしたら、あなたを軽蔑します！」王女は毅然と言い放った。

「そなたは強（こわ）いのう、ヘルガや」国王パウルは焦げたカウチに横たわり、焦げたサイドテーブルから果物をとった。気取った手つきで。豪華なローブもあちこち焼け焦げているが、とりあえず威厳を保持するのが先である。「たまにひとの姿に戻してやれば、それ、すぐにそうやって食ってかかりおる」つくづく、嘆かわしい、と言いたいようだ。

ケストル国王パウルは魔法使いだった。といっても、ヤスウのように実用的な魔法が使えるわけではない。パウルのは、己の欲望を物質化させるというものだった。パウルはヘルガ王女を決して口応えしない、さえずるだけの美しい鳥に変えてしまった。

そもそも、なぜそんなことになったのか。

王女はウルリク王子からのプレゼントだった。ウルリクは外交交渉に来たヘルガを言葉で左右して足止めし、挙句、父王に献上したのである。王女の母国から王女の帰国がなぜ遅れているのかなどといった問い合わせが来ようはずもない。エウメロスが物理的に存在しなくなるのだから。

むろん思いつきでやったわけではない。まず、時間をかけて離宮の建物を改造した。若い娘が好みそうなデザインに造り替え、庭園を拡張して草花や花木を植えまくり、彼女が「うん」と言った暁には、いっせいに花開くように成長をコントロールした。それらは高貴な王女を迎え入れるため、というよりも、美しい離宮を贈られて喜ぶ王女を気

難しい父に献上して、己の株をあげたいという、何層にも積み重なった下心からだった。

ケストル人はなにしろ、我欲と己の価値観がすべてである。王女がこの離宮を気に入るかということは考えに入っていなかった。

離宮を王女に贈る栄誉をも、父に贈ったのだったが、肝心の王女は贈り物に渋い顔をしたのであった。他国においてこのような不動産を贈られる理由も受け取る理由もない、と、やんわりとだが拒否してきたのだ。いや、むしろ、警戒心を呼び覚ましさえ、してしまったのである。

贈り物を拒否された王様は怒った。相手は自分の孫娘でも愛人でもない。他国の王族である。それなのに。

人の好意を断るとは何事か！ 黙って受け取れ！ というわけで激した感情のままに、鳥に変えてしまったのだった。暴走して我に返ったときは遅かった。側近には「隣国がなにか言ってきたら、王女様はどうにお帰りになったとかなんとか、適当なことをいっておけ、まあ、よきにはからえ」と対応を丸投げした。もしかしたら戦争になるかもしれないが、それもまた一興、くらいの感覚だった。なにしろ戦には慣れている。

それでも気がさしてたまに人間に戻せば、気にさわることを言うてくる。ヘルガ本人は母国に起こった異変を知らないし、自分がなぜこんな目にあっているのかわからない。本国からついてきた随行員はどうしたのか、帰国させよ、といった当たり前のことを……相手の気にさわろうが……訴えたくても訴える方法がない。たおやかな姫君は悪夢のなかで失調しかけていた。

そんな時にウルリクが世話係の少女をつれてきた。黒髪に黒い目の異国の少女だった。

「私がマミヤに頼んだのです！ 近くへ行って、よく見てきてくれないかと。それがいけなかったのなら私を罰しなさい！！」

王女の瑠璃色の目は怒りで冷たい水色に変わっていた。王は内心たじろぎながら、顔はにんまりと笑った。王女は内心おぞけをふるいながら、怒りの表出をやめるわけにはいかなかった。

## 50.

「困った。どうしたものであろ。父を喜ばせるはずの計画がまるで裏目に出てしまった」

父王に楽しいショーを披露しようとして、大事な闘技場が吹っ飛んでしまったのだった。もともと、ウルリクにはなぜそんなことになったのか、さっぱりわからない。観覧者たちも閃光に目が眩んでしまってなにもみていなかったのだ。

『導く者』の大好物、それは『怖がる者』だ。恐怖に怯え、惨めさに絶望する魂を見つけるとすかさず食指を動かしてしまう。彼の性分としか、そうすることが好きなのだとしか、いいようがない。

真っ暗なところでうずくまっている少年が彼の興味を引いた。手慰みに話相手をしてからかっている間に物騒なことになってしまった。決闘にまで発展してしまうとは、さしもの彼も思いがけないことだった。

まさかこんな面白いことになるなんて……！ ならば最高に面白いステージを用意し

てあげなくちゃ。

私は『導く者』にすぎない、と彼はうそぶく。私は『導かれない者』にお膳立てをしてやるだけ。それも、最高の。

閃光に目が眩んでなにも見ていないのは彼もまたしかりだった。しかしどうやら、彼のせっかくのお膳立て……楽しみ……をぶち壊し、少年を連れ去ったのはあの立派な体をした男の仕業のようだ。警備のソルドは評議会の者たちと密航少年が揃って行方不明だと騒いで探し回っている。

(そんなに大騒ぎすることかね)

評議会本部にはすでに巨人族を送り込んである。ウルリクは知らないが、実はあと数か所にも。評議会の者たちが逃げたからといって——どこへ？

(なにも探し回らなくたって、あぶりだす方法なんていくらでもあるのにねえ。そんなことは大した問題じゃない、そんなことより——)

「まあ、あなたの計画が残念なことになったのは同情するよ。本当にまずいのはヘルガ王女さ。警戒させたくなかったんだが、今じゃ、敵意をお持ちのようだ」

「ううむ……」

「私が紹介した娘はどうかね？ 役にたちそうかね？」

「ああ、マミヤという娘。王女の方は抵抗がなさそうだ」

「そうかそうか、それはなにより。王女様にはもうしばらくお元気でいていただかないとね。ウルリク王子、あなたのご子息とともに東の国のお城に降臨なさるんだから」

「……………」

ケストル王国は緊急時に保護したヘルガ王女を返還するために、いずれ焦土と化したエウメロスを訪問する。エウメロスの生き残りは諸手をあげて王女の帰還を迎え入れるだろう。そのときはケストルの若き王族、現国王の孫、ヘンリクが同行する。ヘンリクは年齢は二十歳、知名度は低いが、ここでクリーンなイメージを植え付ける。どん底に落ちたエウメロス国民も若々しく清潔な後ろ盾があれば国を立て直す気になるだろう。ケストルにしてみれば労働力と国土がいっぺんに手にはいる。と、というのが『導く者』の計画だった。

そのヘルガ王女を使ってパウルを喜ばせるというのも、発案者は『導く者』だったのだが。ものごとを深く考えるのが苦手なウルリクでも、さすがにこの計画には無理があるのではなかろうかと、ふと疑問に思う。どこかで、パウルからヘルガを取り上げねばならないのでは？ しかしそんなことをしたらパウルを喜ばせるどころか、逆鱗にふれることにならないか？ そのへんはどうなんだろう？

パウルはここしばらく、口応えしてこない鳥を眺めるのに夢中になっていて、さいわい、ウルリクのやっていること……巨人族の軍団の組成……に、気づいていなかった。ならば——鳥にはもうしばらく、パウルの相手をしていてもらえばいいのだ。

そうだ。

ウルリクは考えるのを切り上げた。考えるのは『導く者』に任せておけばいい。無私の『導く者』が、いいように取り計らってくれるだろうから。

51.

「イリチャはついてきているか？」、とヒューダー。

「ああ、少しは眠れたかい？ 翼竜だったら、ぴったり後に。けど、高度が下がってきてる。疲れたのかな」

「ヤスウ、キミも疲れただろ。操縦とヒューダーの治療と同時にやってるもの。代わってやりたいが、あいにくボクにはどちらもできないし」

「ま、しょうがねえよ」言いながらヤスウはうつらうつらと舟をこいでいる。

「せめて、こう、医術の知識とか、傷を縫い合わせる技術とか、持ってたらなあ！ ないものねだりでしかないけれど、今、もうれつにそういうのが欲しいよ！ なにもできない自分がもどかしい！」

「生まれ変わったら医者になれば？ さて、ケストルからだいぶ離れたことだし、どこかで一休みするか。この辺にはいくつも小島があったはず」

恐怖から逃れたくて受け取ったベネトナシュの言葉はパワーと翻弄と混乱に満ちていた。ケストルを遠ざかり、その影響力が弱まるにしたがって、イリチャはしだいに目が覚める心地だった。

目の前で挑発するように翼を振る航空機を追ってきたが、そこでヒューダーが呼んでいるのがわかった。「ついて来い」、と。それはようやくまみえたマミヤを忘れさせる吸引力だった。ぼくに必要だったのはマミヤじゃなかったのか？ しかしヒューダーが呼んでいる。こっちへ来い。おまえに名前をつけたのはオレだ。

空を飛ぶのは気持ちがよかった。浮揚の感覚は水中にいる時と似ているが、その軽さ、解放感はいくらでもならなかった。そして全身に漲る力。ヒューダーの誘導は、彼を肯定するものだあったゆえに、彼に彼本来の力をもたらした。

疲れなどまったく感じなかった。肯定されているという感覚は意識を自由にし、拡大させる。意欲的にさせるといおうか。海面に映る自分の影。ふしぎな形の影に興味を惹かれ、彼は海面に近づいていった。

## 52.

その時。

いきなり、海面が膨れ上がった。

海面を割って現れたのは上下に開いた巨大な口だった。びっしりと植わった鋭い歯が逃げる獲物をどこまでも——どこまでも追いかける。そしてついに捉える。失速の衝撃と翼の付け根に食い込こんだ強靱な顎が、翼竜を海面にたたきつけた。

それは海に棲む首の長い動物、巨大な、肉食の首長竜だった。

首長竜は獲物をくわえて海中に引きずり込み、筋肉が浮き上がった長い首を力任せに幾度も振った。そのたび翼竜は水の抵抗の中を振り回された。広く大きな翼も長いくちばしも、邪魔なだけだった。

翼は裂け、肩が砕け、水中で翼竜は気を失った。

53.

島の王の雅なしるしをはためかせた高速の船が海上を滑ってくるのを見た時、ヤスウは安堵のあまり操縦席からずり落ちた。この海域は彼の故郷の王の領土だったのだ。

「未確認飛行物体が領海空を侵犯した。だから捉えたのだ」

このあたりには貴重な資源が眠っているため、警戒が厳しい。その上、海面すれすれを飛んでいたものだから、網に引っかかってしまったのだと、役人は言った。首長竜は『警戒網』だったのである。その首長竜に海中を曳かれてきた翼竜は、大洋の真ただ中、孤島の浜辺に打ち上げられている。横たわっていてもちょっとした大きさだ。

「はてさて。弱ったものだ」と役人はぼやいた。「まあ、しばし待たれよ。本土に応援を頼んである。こっちのけが人の手当もせんとな。しかし、ついこの間旅立たれて行かれたかと思えば、このような大けがを……」

「いろいろあってね。逃げ出すのが精一杯だった」

ふむ、と役人はヤスウの言葉にびっくりと眉をあげた。「領海空侵犯の知らせに駆けつけてみればまさかのヒューダーどのではないか。ヤスウどのもかなりお疲れのご様子。天幕で休まれるがよい。話しはそれから。えー、そちらのお人……」

「レルといいます。けが人を天幕に運ぶのですね？」

応急の手当はされているものの、ヒューダーはさすがに衰弱して歩くことができない

かった。けがもしていなければ、疲れてもいなかったレルは、すでに航空機の倉庫を漁って、折り畳まれた担架を探し出していた。役人サノヒコはけが人がいると知って、人手を呼び集めた。大洋の孤島とはいっても無人島ではなく、人が住んでいるという。間もなく男女数人が集落からやってきてサノヒコを手伝い始めた。

この島は火山島で、地形のアップダウンが大きく、平坦な場所はほとんどない。そのわずかな平らな場所にヤスウは航空機をおろした。サノヒコは首長竜が捉えたという翼竜を入り江で確認し、高台へ登ってきたのだった。

サノヒコにヒューダーとヤスウを引き渡してしまうと、レルは入り江に降りた。

入り江は深く、外洋から隔たって波は穏やかだった。首長竜は入り江の奥まで翼竜をつかんで離さなかったのだった。侵入者を引っ立ててきたというべきか。沖合で手放されていたら、沈んでしまうか、海流に流され、二度とみつけられなかっただろう。首長竜は首長竜で、ちゃんと自分の仕事をしたわけだ。

波打ち際で波に洗われている翼竜を何とかしてやりたいが、なすすべがない。

「つくづく、無力だよ、ボクは」、そう、気を失っている翼竜に向かってつぶやく。借り物の評議会のから自国の近衛隊の制服に着替えている。湿度も気温も高く、少々窮屈だったが着慣れているし、少しでも自分を取り戻したかった。

「成り行きでこんな見ず知らずのところまで来てしまった。くにはどうなっているだろう。王女殿下は……」

闘技場のロイヤル・ボックス、ケストル王の隣の青い鳥を目にした瞬間、レルは直観した。あの鳴き声の主だ、と。むしように心惹かれる鳴き声だった。そして理由もなく

悟ってしまった。ヘルガ王女！ あれはヘルガ王女だ！

やはりここにおられたのか！ しかし、あの姿はいったい、どうしたことか！

ロイヤル・ボックスに突進し、ケストル王を殴り倒し、王女を取り返すのだ！ 彼の頭はいっしゅん、沸騰しかけた。しかしいっせいに立ち上がった観衆の高揚が沸騰を押しとどめた。なにごとかと思えば、ヒューダー絶体絶命の状況ではないか！ 彼は反射的に走り出していた。ロイヤル・ボックスにではなく、闘技場の真ん中に向かって。

しかし、突然現れた炎の壁でなにも見えなくなった。無念のあまり、レルは金髪をかきむしる。だいたい、なぜヒューダーを選んでしまったのか！ 王女を求めて来たのではなかったのか！

咄嗟だったとはいえ、近衛隊長としての至上の使命に一瞬背を向けてしまったのは事実。生来、生真面目な彼は罪の意識と自己嫌悪に頭を抱えた。

すると……すごそばで、ちゃぽん、と水の音がした。波音ではなかった。はっと顔をあげて振り向いてみると、そこには革をつづって作った大きな袋を二人がかりで担いでいる男たちがいた。片方の男が口を開いた。「水を持ってきた」、と。「その大きな鳥の傷を洗おう」

54.

水。集落があるからには、水をどうしているのか。雨水でも蓄えているのだろうか。そんなことを考えていると、彼らの後から、同じように革の袋を担いだ男たちがもう一

組、やってきた。彼らはいそいそと鳥のくちばしに水をかけて濡らしてやり、傷を洗ってやり、もう一回やろう、と言いついて、来た道に戻っていく。レルは思いついて呼び止めた。

「水は貴重なんじゃないのかい？ 鳥にやっちゃっていいのかい？」

男のひとりが、はた、と立ち止まって応えた。「ああっ！ すまない！ あんたの分まで鳥にやっちゃった！」

「いや、そういうことじゃなくて」

「水ならいくらでも湧いて出るんだ。ただ、ここからはちょっと離れてる。すぐに戻るから」

「こんな海の真ん中の島で？ 真水が湧いて出る？」

レルは好奇心を掻き立てられ、彼らについて行きたかったが、翼竜を放っては行けまいと、思いとどまった。

水を運んできた男たちはその崖の上の高台とは異なる方角へ消えていった。レルはふと気になった。海へ向かって広げた形の両腕は切り立った崖。入り江は崖で囲まれているわけだ。もし——満潮になったら——今いる所は海水でいっぱいになってしまうのでは！？

ぞっ、と、鳥肌がたった。彼は水と縁のない場所で育った。海ともなれば猶更。つまり、泳げないのだ。こんなところで溺れて死んだら、栄えあるエウメロスの近衛隊長の立場がない！ なんだってこう、自分にできないことばかりが巡ってくるんだ！？ またもや金髪をかきむしろうとした、その時だった。入り江になにかが入ってくるのが見えた。海面上を滑るようにやってきたそれは、船だった。

船到着の連絡を受けてサノヒコが浜辺で船を出迎えた。待っていた『応援』だ。

「おお、コタエどの！」船から降りてきたのは若い女だ。レルはひそかに目をみはった。島民の日焼けしたたくましい女たちとはあきらかに違う。きゃしゃな身にまとっている衣服は平面と直線を組み合わせた独特の形をしており、全身から淡い光を放っている。

「お待たせいたしました」弦が震えるような声音で女は言った。「港を発とうとしたとき、お妃さまが来られまして」「なんと！ ご自身が！？」「はい。かがみを持っていくように、と」

女官たちが上質の布で包まれたそれを船からおろす。『応援』は全員女性だった。

布が取られ、現れたのは円い金属製の『かがみ』。周囲をぐるりと囲んでいる繊細な彫刻は文字か模様か。直径は5、60センチはあろうか。かなり大きなものだ。それが、二枚あった。

コタエの指図で、二枚のかがみを翼竜を挟むかたちに配置する。座り込んで様子を見ていたレルは、はっとした。誰かが言っていた。「輪っかに嵌めれば、また元にもどるかもしれない」、と。思わず立ち上がり、身を乗り出す。と、翼竜の全身がほのかに光り出したではないか。

その様子に目を据えて、コタエは言う。「二枚のうち、一枚はおもてのかがみといい、今の見たままの姿を、もう一枚のうらのかがみは、目に見えぬ真実の姿を映し出すのです。その者本人が己の現実の姿を目にして心の在りようを正す。それが本来の使い方なのですが——これは——！？」

サノヒコも、再び水を運んできた村の男たちも、女官たちも、居合わせた者は一人残

らず息をつめて目を瞠って成り行きを見守っている。翼竜自身も光を発していたが、かがみもまたその光を反射し、光輝いていた。発光する本体とそれを反射するかがみと。日が傾いて日陰になった崖の間の入り江は直視できないような光で、いっしゅん、満たされた。目を覆わずにいられない光の炸裂ののち、レルは真っ先に目を見開いていた。そして、ああ、と呻いた。翼竜はいなくなっていた。かわりに、同じ場所には白髪の間が横たわっている。

「おもてのかがみには人が、うらのかがみには鳥が？　するとこの者は……鳥が本当の姿ということ？」

コタエの問いに、レルはなんと応えていいかわからない。鳥——翼竜が本当の姿なのか、人間が本当の姿なのか。首を振りながら彼は言う。

「わかりません。ただ、この者は円環によって魔法をかけられているらしい」

もしかしたらもう一度円環に嵌めればイモリになってしまうのだろうか？　いや、と、レルはまた首を振る。どれが彼の本当の姿であるにせよ、彼自身ははどの姿でいたいのだろう、と。

## 56.

「よお」

「……………」

にっと男が笑う。真っ黒に日焼けし、白目と歯だけが白い。「なんか、うなされてるみてえだったから、声かけたんだ。あんばいはどうだい？」

「ああ……海鳴りが……夢を見ていた……」 ヒューダーはいきなり、がばと起き上がった。「オレはどれくらい眠っていたんだ！　今はいつだ！　ヤスウたちは！」

「まあ、ちょっと落ち着けて。その分だと傷は痛まねえようだな」

「そういえば……」

「本土から医者が来てたからな。治って当たり前だあな。あんたの仲間のふたりはとうにぴんぴんしてるが、ただ……」

男は後ろを振り向いた。天幕で眠っていたのはヒューダーではなかったのだ。

「イリチャ——」ヒューダーは簡易ベッドを降りてもうひとつのベッドを覗きこんだ。

「そいつはまだ目が覚めねえんだ。しぜんに目覚めるまで眠らせといてやれってさ」

そうか、とヒューダーはつぶやいた。肉食の首長竜の牙に噛みつかれたのだ。よく生きていたと言うべきだった。イリチャは顔をわずかに壁の方へ向けて眠っている。よくよく顔を見たのは初めてかもしれない。少年というよりは少女のような繊細な面立ちだ。ほっと息をつき、ベッドに戻って腰をおろすと、「ほれ、水」男が素焼きの器を差し出してよこした。

「ああ、ホシナの里の水もうまかったが、これも……うまい……」

ヒューダーはのどを鳴らして水を飲む。ホシナの里を流れていた水を思い起こさずにいられない。全身の細胞に染みわたって目を覚まさせる清冽さだ。

「おお、ふしぎなんだよな。黒曜石のあるところの水ってうまいんだ」

「——そうだったのか、ゴン、ここはおまえの仕事場か！」

「そういうことさ」

## 57.

ひとまず、彼らは全員本土に渡った。ケガが治りきらないイリチャはまだ療養しなければならなかったし、ケストルを這う這うの体状態で脱出してきたヒューダーたちには仕切り直しの場が必要だった。

ヒューダーから東の大陸で起こっている事件のあらましを聴いたサノヒコは、難しい顔で考え込み、言った。

「我が国もネウトラ評議会に人を派遣しておる。評議会本部が襲われたとなると他人事でない。だいたい、現地からなんの情報も入ってこんのだ」

みな、言葉がない。打つ手が見つからない。

ヒューダーは己の左腕を見る。そこにあった革の腕輪はもう、ない。ないない尽くしだな、と自嘲に唇の片端をつり上げたとき、はたと思い出した。あわてて制服の胸の内ポケットに手を突っ込む。薄く固い感触。あった！

「おい——それ——」

「ダーヴェのだ」向う見ずにも闘技場の真ん中まで駆けてきたマミヤが投げてよこしたのが、それだった。

「先生の眼鏡——なんで——？」それがここにあるということは、本人のもとにないということではないか。ヤスウはさすがのようにヒューダーを見、また眼鏡に目を落とす。くらり、と気が遠くなるのを感じる。

ダーヴェの信号源は今、目の前にあった！

### 第三章 『変態』

第四章へ続く

### 第三章のあとがき

今から2400年前のプラトンの時代から遡ること9000年の昔、つまり、12,000年前、大西洋にアトランティスという海洋王国があったという。

日本はそのころ旧石器人から続く縄文時代草創期。

そして日本には記紀神話というのがあって、この国自体が神話から始まっている。公式に神武天皇即位が紀元前660年2月11日。その神武天皇45歳の時に、「天祖が降臨されてから(自天祖降跡以逮)1,792,470余年……」と発言している。179万年前といたら——ネアンデルタール人よりもっと前、アウストラロピテクスがいた時代じゃなかろうか。

アウストラロピテクスやネアンデルタール人が生きていて、誰だかわからないけど石器を作って狩りをしていた時代に、一方では文明が栄えていた？

伝説や神話と自然科学上の事実との間の矛盾に説明がつくのか。

『神秘学概論』の冒頭部分で著者のシュタイナーが神秘学についてこういった趣旨のことをいっています。曰く、『知られざるもの、隠されたもの、秘密にされたもの、自然科学の上にはないもの。それらについて知ろうと欲する人は、神秘学という言葉に惹かれる。』、と。

第一章のあとがきに書きましたが、神秘学という言葉に惹かれたミネムラは、次いでホツマツタエに出会い、両者の間にたくさんの相通じるものがあることを知りました。

『世界の果ての島』は少しばかりホツマツタエの世界観が反映されています。

神秘学（人智学・神智学など）では人類の進化期が第一根幹時代から第七根幹時代まで、七つに分けられています。第三根幹時代がレムリア時代、第四根幹時代がアトランティス時代。そういう名の大陸があったというのではなく、その時期は地球がまるごとレムリア時代であり、アトランティス時代でした。余談ですが、レムリア時代の中期

（人智学は中生代の中頃（二億年くらい前？）、神智学は1,650万年前だという。かなり開きはあるが、レムリア中期＝進化期の間接点ということで一致している）、男女両性の分離が起きました。

『性が分離し、生殖を単身で担わなくなったことによって、人間は、霊と肉体を仲介し、思考する器官、頭脳を得た。思考は人体の単性化という代償を通して獲得された』。また、『霊の肉体への下降を、墮罪、あるいは原罪と呼ぶ』、とあります。旧約聖書の知恵の実を食べたアダムとイブの物語そのままです。日本の創生神話にも独神から男女対の双神の時代に移ったことが記されています。

『Salamander in...』の二万年前という時期は、第四根幹（アトランティス）時代の終末期であると同時に第五根幹（現行）時代がすでに始まっていたということのようです。このころ日本列島に人が住んでいたのは確実で、もうひとつ、アトランティス人種の言語はすべて膠着語で、フィンランド語、ウラル語などの古代語、それから日本語もそうなんだそうですね。名詞や動詞が変化する語はずっと新しいんですと。

文字というものは、アトランティス時代にはなかった。個々人が優れた記憶力を持っていたから文字で記録を残すという発想も必要もなかった。

当時の列島では、アトランティス系の言語を操る古代からの人と、石器を造る新しい人種とが同居してたのかもしれない。

日々資料を調べなおしたり発掘したりしていると、思いがけない発見があります。そんなわけで急ぎょ、立ち止まったり方向転換したり。ひょっとしたら、次の章は中米（文化）へ行くかもです。

## 奥付

Salamander in the circle

第三章 変態

2021年11月01日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「月とサカナ」 <http://snao.sakura.ne.jp/>

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社

---